

新京動植物園考

Consideration of the Xinjing Zoo & Botanical Gardens (Shinkyō Doshokubutsuen)

犬塚康博

INUZUKA, Yasuhiro

要旨 新京動植物園は、満洲国の首都新京特別市にあった。上野動物園園長古賀忠道の指導のもと1938年に着工され、仙台動物園園長を辞した中俣充志が園長に就いた。広大な敷地に設けられた同園は、動物園と植物園の総合という分類学展示から生態学展示への転換、動物展示における無柵放養式の全面的採用、動物の北方馴化、教育と研究の主導と娯楽の後退、産業への応用など、斬新なテーマを多くもりこんで計画された。指導に際し古賀が「あまり日本の動物園のまねはしないで下さい」と主張したのに即せば、同園は〈日本ならざる未来〉であったと言える。無柵放養式と北方馴化はドイツのハーゲンベック動物園をモデルとしており、狭義には〈極東のハーゲンベック〉を目指したとすることもできるだろう。同園は完成することなく1945年に終焉するが、北方馴化のテーマは北海道の動物園へ、無柵放養式のテーマは多摩動物公園での本格的採用へと、それぞれ継続した。

1. はじめに

「あまり日本の動物園のまねはしないで下さい¹」。

これは、1938年夏、新京動植物園計画指導のため新京特別市に招聘された恩賜上野動物園園長の古賀忠道が、同市の関係者に「大いに主張²」した主旨である。古賀にとって同園の計画は、〈日本ならざる未来〉と言いうるものであった。

その7年後の新京動植物園について、佐藤昌は「残念ながら日本の敗戦、満洲国の滅亡によって、この動植物園は遂に今日廃墟に化してしまった。したがって古賀君の記念的な動物園はなくなってしまったのである³」と戦後に記した。

新京特別市公署公園科長として新京動植物園を担当した佐藤は、古賀の大いなる「主張」に接していたに違いない。ふたりの交点に、「日本の動物園のまね」をしない「古賀君の記念的な動物園」たる新京動植物園があった。

この7年は、新京に本館を置いた満洲国国立中央博物館の6年半とも似かよう。そこにもまた、副館長藤山一雄にとって〈日本ならざる未来〉があったことは、従前の作業で見来たとおりである。「館長藤山一雄先生には個人的に面接もあり、親しく講演をきいた事もあります。博識と見識ある文化人として常に尊敬していたお方でした⁴」と佐藤は短く書く。さらに、名古屋市博物館の展覧会図録『新博物館態勢⁵』に接して、「特に藤山一雄氏の関係資料の数々は当時の氏の面影を「ほうふつ」させます。私が満洲緑地協会を創設した時、この協会の評議員にお願いしたのも、氏の博識と芸術に対する深い識見とによるものでした⁶」とも。

佐藤昌（1893年生）を介して、古賀忠道（1903年生）と藤山一雄（1889年生）がつながる。古賀と藤山が面識を有したか否かは不明である。少なくとも、藤山の著作に古賀の

名は登場しない。しかし、1939年11月11・12・13日、復興間もない皇室博物館を会場にして開催された第9回全国博物館大会の出席者名簿にふたりの名がある⁷。しかも、この大会の2日目に藤山は、「満洲国内に於ける博物館事業の現況」と題する講演もおこなっていた。このとき、古賀と藤山は出会っていたはずである。新京動植物園園長の中俣充志（1904年生）も出席し、記念撮影では古賀と並んで写っていた。

1938年、古賀が新京特別市に招聘され、翌1939年、藤山が日本博物館協会に招待される。1930年代末の博物館界で、日本と満洲とを交通した〈日本ならざる未来〉とは何であったのか。1940年代に向けて、何がおこなわれようとしていたのであろう——。これまで私は、藤山一雄と満洲国国立中央博物館をめぐる考えを進めてきたが、今回は、新京動植物園について検討をおこないたい。

同園については、戦後、高碓達之助の『満州の終焉⁸』や『満洲国史⁹』、古賀忠道の「動物と私¹⁰」など、おもに当事者の回想において記されたのち、『上野動物園百年史¹¹』や佐藤昌の『満洲造園史¹²』などの分野史において記録されてゆく。中俣充志の「新京動植物園の建設計画¹³」の所収誌『博物館研究』が、1980年に復刻されたのもこの動向に位置づく。

同園が研究対象として登場したのは、越沢明の『満州国の首都計画¹⁴』においてであり、新京特別市の都市計画のなかで言及された。そして私は、満洲国国立中央博物館の調査を進める途上で新京動植物園に関する情報に接し、「新京の博物館¹⁵」にて概観した。名古屋市博物館特別展「新博物館態勢 満洲国の博物館が戦後日本に伝えていること」（1995年）では、関係資料の集成・公開ならびに図録¹⁶への写真掲載と解説とをなし、このうち一部資料の分析を「新京動植物園のライオン¹⁷」でおこなった。

これと時期を同じくする頃、新京動植物園を素材にした村上春樹の作品¹⁸が公にされる。これに対し川村湊は、村上の作品が新京動植物園という事実に基づきながらも事実でない物語のあることを指摘し¹⁹、文学において満洲国が素材となることの思想的意味を問うた。近年は、演劇にも登場している²⁰。

2. 新京動植物園の計画

新京動植物園の計画は、中俣充志の「新京動植物園の建設計画²¹」によって知ることができる（文末図参照）。以下、これに即して眺めてゆこう。

表1 新京動植物園の敷地面積値の異同

文 献	坪数	平米数
中俣充志「新京動植物園の建設計画」	235,000 坪	(775,500㎡)
新京特別市公署公園科『新京特別市公園概況』		717,627㎡
日本博物館協会編「大東亜博物館案内」		780,000㎡
満洲国史編纂刊行会編『満洲国史』各論	2,355,000 坪	(7,771,500㎡)
佐藤昌「古賀忠道君を偲ぶ」	300,000 坪	(990,000㎡)

表2 全国主要動物園の敷地面積一覧（1937年）

園齡	名 称	面 積	
		坪	m ²
2	仙台市動物園	8,146	26,881
56	上野恩賜公園動物園	12,637	41,702
4	井之頭恩賜公園動物園	2,800	9,240
22	甲府市動物園	2,500	8,250
20	名古屋市東山動物園	50,470	166,551
38	京都市記念動物園	12,293	40,566
23	大阪市天王寺動物園	18,313	60,432
10	神戸市諏訪山動物園	1,250	4,125
14	阪神パーク動物園	2,500	8,250
6	宝塚動物園	2,560	8,448
8	栗林動物園	1,888	6,230
5	到津遊園動物園	14,500	47,850
5	福岡市記念動植物園	5,096	16,816
9	熊本市動物園	5,795	19,123
12	鹿児島市鴨池動物園	3,000	9,900
23	台北市動物園	13,745	45,358
29	昌慶園動物園	55,000	181,500
—	新京動植物園		717,627

注) 新京動植物園の値およびm²の値以外は「全国主要動物園一覧表」『博物館研究』第11巻第2号、日本博物館協会、1938年、6頁に基づいて作成。m²値は換算した際に小数点以下切り捨て。

を混合²³」する計画であった。動物園と植物園の併設は、福岡市記念動植物園や名古屋市東山動物園・植物園でおこなわれていたが、これらでは園域が明確に区分されていた。新京動植物園では、おおむね東側を動物園域とし、「西側に植物園の主体をなす植物温室を設け、これに栽培場見本園を附属²⁴」するとしながらも、ここに「水族館愛玩動物舎、児童動物園、乗馬場、釣堀、水禽舎の如く軟かい感じの動物園²⁵」の諸施設をも配置している。これが大局的な園域区分の特徴とすれば、動物園と植物園の「各その主体となるべき処はあつてもこれを判然と区画する事なく動物舎に対してはその動物の産地種類に従つて夫々適応した植物を配置し又植物温室に於ても夫々適当な禽獣を配列して動植物を混然一体となし観る者をして恰かも自然界に於ける動植物の生育状態を髣髴たらしむる²⁶」とは、その細部と言える。しかし、これこそ細部にとどまらない新京動植物園の博物館思想、その斬新であった。つまり、すでに動物学者のあいだで主題化されていた、分類学的展示から生態学的展示への明らかな転換と定着だったのである²⁷。

動物園における「無柵式放養場²⁸」（以下、無柵放養式と称する）の採用は、新京動植物園の主題の一つである。無柵放養式は、1907年、ハンブルク郊外のシュテリンゲンに開園したハーゲンベック動物園の展示手法で²⁹、日本の動物園関係者は異口同音にこれの日本での実現を願っていた。上野動物園のホッキョクグマ展示が1928年に採用し、1937年、名古屋市の東山動物園が当初からライオンとホッキョクグマの展示で無柵放養式を計画し実現する。広い敷地を有したことで、新規造営であったことがこれを可能にしたわけだが、東山動物園を凌駕する広大な敷地において、同様に新設の新京動植物園が無柵放養

同園は、伊通河の支流1～2条が流れ、起伏に富んだ地形の敷地の「面積は二十三万五千坪²²」を数えた。敷地面積は、同園を考える際の重要な与件である。しかし、値は文献によって異なる（表1参照）。同園が新京特別市公署公園科の所管であったことを考慮して、ここでは717,627m²を採用しておきたい。

717,627m²は、このなかでは最小値だが、当時国内の動物園と比較するとき、突出した数字であることがわかる（表2参照）。1937年に移転開園した名古屋市の東山動物園（166,551m²）と東山植物園（約180,000m²）の敷地面積は、あわせて約350,000m²であった。当時、東山動物園のみで「東洋一の動物園」を標榜したが、その2倍を超える敷地面積を有した新京動植物園のなんと広大であったことか。

新京動植物園は「動物園と植物園と

式を全面的に採用するのは、動物園の理論と歴史の必然的な統一であった。

「特殊気候の関係上熱帯動物改容場^(改)を互ひに連結して馬蹄型となし、その中央部に暖房室を設けて各室に通じ夏期は運動場に放養し冬期は寢室に於て観覧せしむる³⁰⁾」ことも、新京動植物園の主題である。当時日本最北の動物園は北緯約38度の仙台市動物園だったが、それをさらに北上する北緯約44度の新京における動物飼育は、日本の動物園関係者には未知の体験であった。これを政治的に言うと、「新京に於て世界各地の動植物を飼養育成しその完全なる生育状態を示すはそれが直ちに満洲国の気候風土に対する誤れる認識を是正し安住の地なることを雄弁に実証し以て移民政策に寄与する³¹⁾」となる。もちろん、北緯約53度のハーゲンベック動物園が念頭にあったことは言うまでもない。ハーゲンベック動物園の主たるテーマも、「風土に馴らす³²⁾」ことであった。

目的に掲げられた、「各種動植物を蒐集飼育育成し、一般の観覧に供し学術研究並に社会教育の参考に資し、併せて民衆の慰安体育の向上に力むるを以て目的とす³³⁾」のくだりは、中俣が括弧書きで記した文章であり、文体をも考慮すると、設置条例など法制度の存在が予想された。しかし、そうではなかったようである³⁴⁾。このなかで、「各種動植物を蒐集飼育育成」および「一般の観覧に供」することは通有だが、「学術研究並に社会教育の参考に資し、併せて民衆の慰安体育の向上に力むるを以て目的とす」とした点は注意される。

1900年代中葉以降のわが国では、各地に動物園、水族館、植物園が登場し、大正期には娯楽施設として急速に普及していった。こうした動物園の現状に対し、「動物園は兎角猛獣奇鳥を蒐めた趣味的娯楽場に墮し勝て「動物学」とは凡そ縁遠いものとなる嫌があり学術界からは当事者の注意を促されてゐる実情にある³⁵⁾」という定型化した批判が、遅くとも1930年代には動物学の側からおこなわれていた。これに見られるような、〈娯楽か、学術研究・社会教育か〉という問いが動物園界では繰り返されてきたわけだが、新京動植物園では「学術研究並に社会教育の参考に資」することが前面におしだされ、〈娯楽〉の字句は姿を消す。もちろん、既存の動物園においても動物学からの再編がおこなわれていたが、新京動植物園は計画当初から動物学など学術の主導下に置くことを、その目的に明記していたのである。

その具体的方策として掲げられた項目のうち、「学術方面に於ても」「園内動植物の調査研究及び之が発表をなし又天然記念物となるべき動植物の保護保存に力を致し更に園内講義室を設けて小中学校教室の延長として提供し動植物の講義講演を行ひ、又畜産動物、畜産製造、動植物の病理研究室をも設け³⁶⁾」るとするのが、〈学術研究〉である。

「従来軍閥政治に虐げられ、教育の程度低く国家の何たるかも知らず、ひたすら為政者の搾取から遁れんとする自主的觀念に培れ来つた満洲住民に対し動植物園の如き一般的な軟か味ある文化施設を設けて社会知識の開発に力め又国内各地各人の捕獲採集した動植物を寄贈せしめ或は購入して宣伝し、不言不語の裡に国民の歓心を国都に集中せしめ従つて国家觀念を涵養せしめんとする³⁷⁾」こと、および「酷寒酷暑の候に於ける婦女子の戸外運動を促して体育保健の向上に力め殊に第二国民に対しては児童遊園等の娯楽機関の外児童動物園を区画して児童と動物とを仲よく遊ばしめ或は又簡單なる説明を加へた実物模型絵画等を陳列して児童の智識慾と研究心の芽生へを促し、一方動物愛護の精神より進んで博愛心へ導く思想善導の教壇とする³⁸⁾」ことが、〈社会教育〉となる。

〈娯楽〉は、辛うじて「児童遊園等の娯楽機関」として児童に対してのみ残存し、しかも動物でも植物でもない「遊園」へと、いったん外化されたのちに内面化されている。娯楽施設たる動物園で就労してきた動物学関係者たちによる、動物園の全面的な読みかえがここにある。「斯くの如き配列の処々に緑地を設け、或は国産花物を栽植し勝景の箇所には休憩所、食堂を置き、是等各施設の間を縫」う「苑路は観覧順序を考慮に入れ力めて自然味を出し敷地の広大なるを利用して、都人のハイキングコースとして利用せしめる³⁹⁾」ことも、〈娯楽〉と言うよりは「慰安体育」に相当するだろう。

趣を異にするのが「園内に毛皮獣研究所、養兎場、養鶏場、薬草栽培場等を設けて政府の産業政策に呼応し附属農園^(例)によつて資料の自給自足を計り各種の生産事業を興して収入の大部分を作り、入場料金に拘泥しない方針⁴⁰⁾」への言及である。先に見た同園の目的の文章にも、これに直接かかわる文言はなかった。動物園の生産事業については当時の動物学者のあいだでも意見の相違があったが、平時における産業への接続を動物園の側から提起したものと言える。つまり、じきに空襲危機や飼料難を表向きの理由に動物処分をおこなう日本各地の動物園が、そのうち養鶏や養豚をおこなうという「代用」の合理化とは異なる経営がこの方針には見て取れる。就中「附属農園^(例)によつて資料の自給自足を計」ることは、動物園経営の生命線であった。動物園における飼料の財政問題は常に動物園関係者の重大かつ現実的な問題であり、同園ではこれの解決が当初より目指されていたことがわかる。

「畢竟するに本園は飽くまで学術的にして而も生産的方面に進む方針⁴¹⁾」が、正しくとられていたのである。

3. 新京動植物園の実際

新京動植物園計画は、1938年、「新京特別市の副市長関屋悌蔵と総務長官の星野直樹から出た話であった⁴²⁾」。これ以後、終焉を迎えるまで、1940年9月15日の開園を境におおむね前・後期に区分することができる。

前期は、「第一期工事」とよばれた期間に相当し、園内整備工事のほか動物収集がおこなわれた。計画策定に際して指導をおこなった上野動物園園長の古賀忠道に推薦され、中俣充志が園長に就任する。中俣は、東京帝国大学農学部獣医学科で古賀の1年後輩にあたり、前任地の仙台市動物園園長への就任も古賀の推薦によるものであった。この中俣にともない、同じく仙台市動物園の職員であった瀬戸川豊忠、山家英、渡辺勇五郎が新京に移る⁴³⁾。新京動植物園のスタッフの中心が、仙台市動物園の人たちで占められたのは、動物の北方馴化ゆえのことであったに違いない。

古賀の来京後の8月に工事がはじまる⁴⁴⁾。この時期の状況を記録した瀬戸川豊忠の写真から判明するのは、以下のことがらである⁴⁵⁾。

- (1) シカ舎とシカ放養場、仮設トラ舎が設置されている。
- (2) 猿山、正門、事務所、外周壁の工事が着工されている。
- (3) 1939年5月、瀬戸川豊忠と中俣充志が、動物収集のため哈爾濱へ出張している。
- (4) 1939年7～8月、瀬戸川と山家英が、動物収集のため内蒙古へ出張している。
- (5) 1939年10月、瀬戸川と一ノ瀬幸三が、動物収集のため牡丹江省へ出張している。

そして1940年8月、上野動物園からライオン2頭を受贈する⁴⁶。開園直後に収容していた主な動物について、「マンシウアカシカ、北満ヒグマ、カウライタヌキ、キスナヒツジ、赤狼、穴熊、タヌキ、キツネ。ハリネズミ、マンシウワシ。ハゲワシ、ツル、ノロ、スプシヤン、ライオン、トラ、大山猫、サル等の外、鳥も沢山居ります。／虎は六頭居ります（略）。又八月に東京市から 皇帝陛下に贈られたライオンの赤ちゃん二頭はもうすっかり慣れて元気です⁴⁷」とある。同園はこの開園を一つの区切りとし、開園後の10月1日に第1期工事竣工式もおこなった⁴⁸。なお調査研究は、前期・後期の区別なく続けられ、園内の鳥類観察が着手されている⁴⁹。

そして1941年2月、古賀忠道がふたたび新京を訪れ、新京動植物園の指導にあたる。動物収集と施設整備が進められてゆくが、この時期の特筆事項は、満洲重工業開発株式会社副総裁（当時）高崎達之助による動物および資金の寄附であろう。1939年夏に渡満し新京動植物園を見た高崎は、「動物園とは名ばかり、猿が十匹位に虎、その他が若干いるに過ぎない」として、「この動物園の拡充を、政府の力を借りずに、自分の財力の許す範囲でやつてみた。先ず、こゝに熱帯動植物を移植することゝし、自ら設計して⁵⁰、温室を建築し、それに、私が日本で飼っていた鱷、蛇、亀類、それに各種の熱帯動物を移し始めた⁵¹」。爬虫館は、1942年9月15日頃の完成で、オオニシキヘビ、ゾウガメ、アリゲーター科とクロコダイル科のワニなど40頭が収容される予定が報道されている⁵²。なお、1943年9月に、中俣が上野動物園園長に宛てて、処分の迫る動物を一時預かる旨打電した際、「セツビ ノカンケイゼ ウサシアタリハチウルイゼ ンブ⁵³」としたのは、高崎の寄附金による爬虫館に収容することを前提にした提案だったと思われる。高崎は、このほかにハンプシャー種の豚5頭⁵⁴、ダチョウ2羽、エミュー1羽⁵⁵を寄附した。

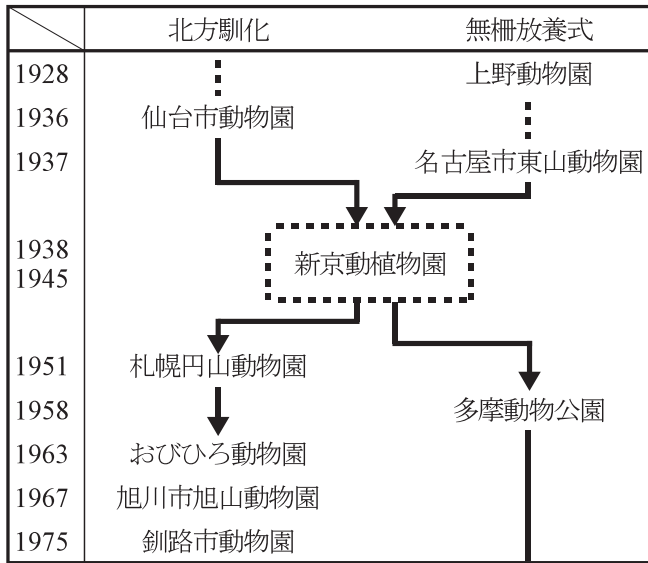
1942年8月1日に入場料徴収がはじまり、大人20銭、軍人10銭、学生・生徒10銭、大人30人以上の団体が2割引、学生・生徒の団体が5割引という料金が設けられている⁵⁶。また、このとき定められた開園時間は、8月が午前8時から午後6時まで、9月が午前8時から午後5時まで、10月が午前9時から午後4時までであった。同年9月17日には、キツネ50頭の競争入札が市会計科主催で実施されてもいる⁵⁷。

日本博物館協会が集約した1944年段階の同園に関するデータは、「土地面積 七八〇、〇〇〇平方米。／収容動物 哺乳類二種二八六点、鳥類三三種七五四点、爬虫類六種三五点。／教育事業 一般施設の完備と同時に、園内に養鶏場、毛皮獣研究所、養豚場、乳牛舎或は薬草園を設けて飼育管理の改善、兎禽畜の払下等を行つてゐる。／年経費 経営費一五、〇〇〇円、建築事業費五〇〇、〇〇〇円。／入場延人員 康德九年八月開館後の平均一日入場者一、三〇〇人⁵⁸」であった。

4. 日本ならざる未来

新京動植物園の前期と後期それぞれのはじまりに、古賀忠道が登場しているのは象徴的である。「古賀君の記念的な動物園⁵⁹」と呼ばれたゆえんもここにあるだろう。新京動植物園の施設、目的、事業のすべてが、〈日本ならざる未来〉をあらわしていた。就中、動物の北方馴化と無柵放養式が新京動植物園計画の主題であったことから、計画のめざすところは〈極東のハーゲンベック動物園〉だったと言うこともできる。

表3 動物園の主題の系統



ところで、別稿でそうしたように、本稿も北方馴化や無柵放養式とともに「児童動物園」を新京動植物園の特徴に掲げるべきだったかもしれない。しかし、以下の理由からこれをおこなわなかった。

確かに、戦前・戦中の日本でなしえなかった子ども（児童）動物園を、新京動植物園は実現の俎上にのせた。そしてこの事業が夭折したのちに古賀忠道は、1946年11月の「博物館並類似施設振興に関する協議講習会」（文部省・日本博物館協会主催）において「動物園将来の諸施設と子供動物園に就て」を講演

し⁶⁰、さらに1948年7月の「文化観覧施設講習会」（日本博物館協会主催、文部省後援）でも「子供動物園の構想」を講義して⁶¹、指標のごとく「子供動物園」を喧伝し、戦後の新しい動物園の進路を方向づけていた。そして、自身が園長をつとめた上野動物園では、1948年4月に子供動物園を開設する⁶²。植民地動物園のシンボルとなっていたかもしれない子ども動物園は、戦後平和と民主主義の動物園のシンボルへと変節したかのように見える。しかし、新京動植物園に対する古賀の指導に「児童動物園」があったわけではなかったらしいことと⁶³、1945年以前の博物館界で「児童動物園」の必要を説いたのは動物学者の岡田弥一郎ぐらいであり⁶⁴、必要の認識はあったものの、戦後喧伝されるほどではなかったのである。

さて、新京動植物園の消滅以降中俣は、1946年6月から1947年8月まで留用されて長春大学教授を務め、そののちに引き揚げた⁶⁵。しばらくは、「ラムネを売ったりしながら苦しい生活を続けていた⁶⁶」と言う。そして三度古賀の推薦を得て、北海道に最初で戦後最北となる札幌市円山動物園の園長に就任する（1950年9月～1964年7月）。中俣の、仙台、新京での経験が買われての人選であったに相違ない。円山動物園では、チンパンジー、アシカ、カンガルー、ゾウなどを調教しショーをおこなった。また、開園10周年記念事業として「夜の動物園」を実施し、「ホテルや花火を配ったり、アトラクションを行ったり⁶⁷」もした。こうしたようすには、新京動植物園計画の〈日本ならざる未来〉は見られない。〈娯楽〉を外部化した動物園の博物館運動は、動物そのものをふたたび〈娯楽〉化したのであろうか。

札幌以後の中俣は、より北方の旭川市旭山動物園建設委員（1964年8月～1967年5月）、同園名誉園長（1967年6月～1972年3月）を歴任し、1975年5月11日に他界する。

北上するわが国の動物園に、いつも中俣充志の姿があった。古賀忠道とともにあった。公園の附属施設に過ぎなかった動物園が、新京動植物園計画において公園そのものとなるには、佐藤昌の存在が不可欠だった。動物の北方馴化は北海道の動物園の経験へ、無柵放養式は多摩動物公園での本格的採用へとそれぞれいたる（表3参照）。〈日本ならざる未来〉

は、未来の日本で再演される。しかし不完全に——。

*

いま私たちは、旭山動物園ブームに遭遇している。無柵放養式は同園にも採用されたが、敷地の狭隘と急傾斜地ゆえそれ以上には発展せず、やがて同園の言う行動展示の手法が生み出されてゆく。

ところで石川千代松は、「ステルリンゲンのハーゲンベック動物公園では、深い池を掘り、その周囲の壁をがらす張りにして外から水中が見えるようにし、水中のペンギンの活動を観察し得るように造るつもりだといふ話を、私は、欧州大戦の前にハーゲンベック自身から聞きましたが、それはたぶん出来上らなかつたかと思ひます⁶⁸」と書いていた。このことはさらに、「また欧州大戦のために結局それは出来ませんでした。南洋の動物を見せるために、地下に大きな池をつくり、その四方をトンネルにしてガラスで張り、外部からイルカやアシカなどが水中に泳いでゐる有様を見ることの出来るやうにし、また外の壁には、活動写真で景色が見えるやうにするつもりであつたと、ハーゲンベックはいつていました⁶⁹」とも書かれてゆく。ハーゲンベック動物園に、第一次世界大戦によって潰えた、当時未発の展示手法があつたらしいのだ。これが、理性の狡知のごとく、旭山動物園の行動展示に再演されていることに気づかないわけにはいかない。またしてもハーゲンベックである。〈日本ならざる未来〉には、いつもハーゲンベックがあつた。しかし、それは〈ドイツなる未来〉の意ではない。動物園という理性の自己実現は、ときとところを選ばずあらわれると言うべきであろう。〈日本ならざる未来〉は、いまも〈日本の外部〉で息づいているのかもしれない。

¹ 古賀忠道「動物と私」その11『うえの』第47号、上野のれん会、1963年、41頁。なお、本稿における引用は、旧字体から新字体への改変、新聞記事のルビの削除にとどめ、かなづかい、拗促音、句読点、地名、誤脱字などは原文のままとした。年号表記はすべて西暦年でおこない、人名の敬称は省略した。地名は基本的に当時のものを用いた。人名の旧字体、新字体は統一していない。

² 同論文、41頁。

³ 佐藤昌「古賀忠道君を偲ぶ」古賀忠道先生記念事業実行委員会編『古賀忠道 その人と文』、古賀忠道先生記念事業会、1988年、152頁。

⁴ 1994年6月1日付葉書。

⁵ 名古屋市博物館編『新博物館態勢 満洲国の博物館が戦後日本に伝えていること』、名古屋市博物館、1995年。

⁶ 1995年10月30日付書簡。

⁷ 「第九回全国博物館大会出席者名簿」『博物館研究』第12巻第11号、日本博物館協会、1939年、6-7頁。

⁸ 高崎達之助『満洲の終焉』、実業之日本社、1953年。

⁹ 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史』各論、満蒙同胞援護会、1971年。

¹⁰ 前掲「動物と私」その11、38-41頁、同「動物と私」その13『うえの』第49号、上野のれん会、1963年、40-43頁。

¹¹ 東京都『上野動物園百年史』、第一法規出版株式会社、1982年、同『上野動物園百年史』資料編、第一法規出版株式会社、1982年。

¹² 佐藤昌『満洲造園史』、財団法人日本造園修景協会、1985年。

¹³ 中俣充志「新京動植物園の建設計画」『博物館研究』第13巻第2号、日本博物館協会、1940年、3-4頁。

¹⁴ 越沢明『満洲国の首都計画』、日本経済評論社、1988年。

¹⁵ 犬塚康博「新京の博物館」『満洲国』教育史研究会編『満洲国』教育史研究』第2号、東海教育研究所、1994年、30-45頁。

¹⁶ 前掲『新博物館態勢 満洲国の博物館が戦後日本に伝えていること』。

- ¹⁷ 犬塚康博「新京動植物園のライオン」『博物館史研究』No.4、博物館史研究会、1996年、36-38頁。
- ¹⁸ 村上春樹「動物園襲撃（あるいは要領の悪い虐殺）『ねじまき鳥クロニクル』第3部〈鳥刺し男編〉より」『新潮』第91巻第12号、新潮社、1994年、6-24頁。
- ¹⁹ 川村湊「『大東亜』の戦後文学第2回 満洲追憶」『文学界』第49巻第9号、文藝春秋社、1995年、196-210頁、川村湊「ねじまき鳥・オウム・カナリア」満蒙開拓団調査研究会編『「満蒙開拓団」の総合的研究 研究中間報告論文集』、1997年、151頁（初出は『南信濃新聞』、1995年8月10日）、川村湊『満洲崩壊』、文芸春秋社、1997年。
- ²⁰ ニットキャップシアター・電遊科学館「新京の動物園」製作事務局「新京の動物園」、<http://shinkyō2002.at.infoseek.co.jp/>（2006年11月21日）。
- ²¹ 前掲「新京動植物園の建設計画」、3-4頁。
- ²² 同論文、3頁。
- ²³ 同論文、3頁。
- ²⁴ 同論文、4頁。
- ²⁵ 同論文、4頁。
- ²⁶ 同論文、3頁。
- ²⁷ 川村多実二「動物園の改善策」『博物館研究』第13巻第1号、日本博物館協会、1940年、1-5頁。
- ²⁸ 前掲「新京動植物園の建設計画」、3頁。
- ²⁹ カール・ハーゲンベック『動物会社ハーゲンベック』平野威馬雄訳、白夜書房、1978年、280-283頁。
- ³⁰ 前掲「新京動植物園の建設計画」、3頁。
- ³¹ 同論文、4頁。
- ³² 前掲『動物会社ハーゲンベック』、274-305頁。
- ³³ 前掲「新京動植物園の建設計画」、4頁。
- ³⁴ 佐藤昌氏のご教示による（1994年8月18日付書簡）。
- ³⁵ 「大阪市立動物園で一般動物の調査」『博物館研究』第9巻第10号、日本博物館協会、1936年、12頁。
- ³⁶ 前掲「新京動植物園の建設計画」、4頁。
- ³⁷ 同論文、4頁。
- ³⁸ 同論文、4頁。
- ³⁹ 同論文、4頁。
- ⁴⁰ 同論文、4頁。
- ⁴¹ 同論文、4頁。
- ⁴² 前掲「古賀忠道君を偲ぶ」、151頁。
- ⁴³ 金田寿夫氏に教示いただいた中俣の履歴によると、1939年10月から1945年8月まで、満洲国国務院大陸科学院馬疫研究処（職名不明）と新京動植物園園長を兼務したとある（1992年1月22日付ファクシミリ）。しかし、瀬戸川豊忠の写真の分析結果では、1939年5月の時点で中俣は在京している。したがって、1938年12月に仙台市動物園を退職してほどなく新京に渡ったものと考えられる。
- ⁴⁴ 佐藤昌氏のご教示による（1994年8月18日付書簡）。当初から第1期、第2期と工期が予定されていたわけではなかったと言う。なお、6月着工とする異説もある。「いよ〜開いた／新京の動植物園」『新満洲』第4巻第11号、満洲移住協会、1940年、201頁。
- ⁴⁵ 前掲『新博物館態勢 満洲国の博物館が戦後日本に伝えていること』、74頁。
- ⁴⁶ 前掲「新京動植物園のライオン」、36-38頁。
- ⁴⁷ 前掲「いよ〜開いた／新京の動植物園」、201頁。
- ⁴⁸ 「南嶺動物園」『満洲グラフ』第8巻第12号、南満洲鉄道株式会社、1940年、頁数なし。
- ⁴⁹ 島津久健・高須賀大三郎「新京動植物園敷地内にて観察せし鳥類に就て（予報）」『満洲生物学会会報』第3巻第3号、1940年、96-98頁、高須賀大三郎・瀬幸三「新京附近の野鳥」、満洲生物学会例会講演、1942年4月19日。
- ⁵⁰ 爬虫館の設計は新京特別市の建築技師によるものであった。佐藤昌氏のご教示による（1994年8月18日付書簡）。
- ⁵¹ 前掲『満洲の終焉』、80頁。
- ⁵² 「ジャングルその外／爬虫類館近く開場」『満洲新聞』、1942年9月7日。
- ⁵³ 前掲『新博物館態勢 満洲国の博物館が戦後日本に伝えていること』、77頁。
- ⁵⁴ 「動物園の珍豚」『満洲新聞』、1942年3月22日。
- ⁵⁵ 「南方から珍鳥／ひくひく鳥と駝鳥／南嶺に熱帯の爬虫館も完成」『満洲新聞』、1942年6月30日、「虎の放ち飼ひ／南嶺動植物園名実共に東洋一／駝鳥も近くお興入れ」『満洲新聞』、1942年7月26日、「駝

鳥クンお興入れ」『満洲新聞』、1942年9月4日。

⁵⁶ 「入場料を徴収／南嶺動物園」『満洲新聞』、1942年7月28日。日本博物館協会編「大東亜博物館案内」『博物館研究』第18巻第1・2・3号、日本博物館協会、1945年、3頁は、この日より「その一部を開園して一般の観覧に供することとなつた」とする。

⁵⁷ 「動物園の狐を入札」『満洲新聞』、1942年9月6日。

⁵⁸ 前掲「大東亜博物館案内」、3頁。

⁵⁹ 前掲「古賀忠道君を偲ぶ」、152頁。

⁶⁰ 「博物館並類似施設振興に関する協議講習会要項」『博物館研究』復興第1巻第1号、日本博物館協会、1946年、6-7頁。

⁶¹ 「文化観覧施設講習会」『博物館研究』復興第2巻第2号、日本博物館協会、1948年、4-5頁。

⁶² 前掲『上野動物園百年史』、208-212頁。

⁶³ 佐藤昌氏のご教示による（1994年8月18日付書簡）。

⁶⁴ 岡田弥一郎「動物園の施設に対する希望」『博物館研究』第10巻第10号、日本博物館協会、1937年、2-3頁。

⁶⁵ 金田寿夫氏のご教示による（1992年1月22日付ファクシミリ）。

⁶⁶ STVラジオ編『続 ほっかいどう百年物語』、中西出版株式会社、2002年、316頁。

⁶⁷ 同書、321-322頁。

⁶⁸ 石川千代松『動物園』（日本児童文庫43）、アルス、1928年、212頁。

⁶⁹ 同「博物館の話」（2）『博物館研究』第7巻第2号、日本博物館協会、1934年、9頁。

謝 辞

本稿をなすにあたっては、次の方々に協力いただきました。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。佐藤昌、佐藤秀樹、山崎康次、金田寿夫、小森厚、大内秀夫、上野のれん会、武智英生、瀬戸川昶子、山家英、山家ハルヨ。



図 新京動植物園計画図

「新京動植物園計画図」（中俣充志「新京動植物園の建設計画」『博物館研究』第13巻第2号、日本博物館協会、1940年、3頁）に加筆して作成。図中「凡例」の表記は次のとおり。1. 正門 2. 噴水 3. 猿山 4. 象 5. 事務所 6. 演劇場 7. 麒麟 8. 海獣 9. 満洲鹿 10. 毛皮獣研究所 11. 附属農園 12. 水禽放養池 13. 虎 14. ライオン 15. 豚放養場 16. 黄羊放養場 17. 馬場 18. 釣堀 19. 大温室 20. 水族館 21. 花壇 22. 見本園 23. フライングケージ 24. 孔雀 25. 児童動物園